成人男女の性行動に対するパーソナリティの効果

塩　谷　芳　也

要　旨

本研究の課題は，日本における成人の性行動とパーソナリティの関連性を解明することである。日本全国に居住する 20–59 歳の男女を対象に，2019 年 9 月に Web 調査を実施し，性交経験人数とビッグファイブによるパーソナリティ（外向性，協調性，勤勉性，神経症傾向，開放性）を測定した（N=300）。性交経験人数を従属変数，ビッグファイブを独立変数として，年齢，教育年数，個人収入をコントロールしながら男女別に重回帰分析を行った。その結果，男性では，外向性と協調性が性交経験人数に対して有意な効果を持ち，外向性が高いほど，また協調性が低いほど性交経験人数が大きくなる傾向が見られた。しかし，女性ではいずれのパーソナリティも有意な効果を示さなかった。これらの結果について，先行研究と比較しながら議論を行った。

キーワード：性行動，性交経験人数，パーソナリティ，ビッグファイブ，日本の成人

1. パーソナリティは性行動に影響するのか

本研究の課題は，日本の成人男女の性行動とパーソナリティとの関係を解明することである。具体的には，何人の相手と性交渉を持ったかという性交経験人数に着目しながら，ビッグファイブと呼ばれるパーソナリティの５つの次元，すなわち外向性，協調性，勤勉性，神経症傾向，開放性との関係を分析する。これにより，性行動という私生活領域における人びとの行動に対して，パーソナリティがどのように影響しているのかを明らかにする。

パーソナリティとは，人びとの「性格」のことであり，その人に固有の，時間や状況を超えてある程度一貫した思考，感情，行動のパターンと定義される（塩谷 2019）。パーソナリティは，個人の特徴を表す中心的で安定した心理的特性であり，人びとの行動の差違を説明する概念である（Nyhus and Pons 2005）。

パーソナリティの構造については，パーソナリティ心理学の分野において長らく議論が交わされてきた。しかし，近年では，パーソナリティは５つの次元から構成されることについて学術的なコンセンサスが得られており，５因子モデルが主流となっている（Nettle 2007=2009）。５つの次元とは，「外向性（extraversion）」，「協調性（agreeableness）」，「勤勉性（conscientiousness）」，「神経症傾向（neuroticism）」，「開放性（openness to experience）」であり，ビッグファイブと呼ばれている（小塩 2018）。ビッグ・ファイブは，文化を超えて確認されること，自己評定と他者評定が一致すること，遺伝によってある程度規定されることが知られている（鈴木 2012）。

各因子の特徴は次の通りである（Nyhus and Pons 2005：塩谷 2019）。「外向性」とは，対人的な接触を好む傾向の強さであり，他者に関心を向け，働きかけようとする傾向の強さである。外向性の高い人びとは，人と一緒にいることを好み，積極的に自己表現する傾向がある。

「協調性」とは，他の人を助けたいと考え，他者の利益と一致するように行動する傾向の強さである。協調性の高低は，ある個人が協力的で心温かく好感が持てる人物なのか，敵対的で冷酷であり付き合いづらい人物なのかという程度を表している。

「勤勉性」とは，ルールやスケジュールに従い，約束を守り，仕事熱心であり，堅実で信頼できる傾向のことである。誠実性の対極にあるのは，怠惰である，だらしない，信頼できないといった特徴である。

「神経症傾向」とは，穏やかで自信があり冷静なのか（神経症傾向が低い），あるいは不安を感じやすく心配性であり，感情的なのか(神経症傾向が高い)という次元を表している。リラックスしているのか神経質なのか，自律的か依存的かという要素も含まれている。

「開放性」とは，想像的かつ創造的であり，知的好奇心が旺盛という次元である。開放性の高い人びとは，新奇な刺激や経験を求めて積極的に行動する傾向がある。

本研究では，このようなビッグファイブで表現されるパーソナリティと性交経験人数の関連性について分析を行うが，これに関連する性行動について先行研究では次のような報告がなされている。

アメリカの大学生男女 583 名について分析した Raynor and Levine（2009）は，外向性が高いほど，また協調性が低いほど性交経験人数（過去 1 年間の性交相手の数）が大きくなることを示している。

Schmitt（2004）は，北アメリカ，西ヨーロッパ，オセアニア，東アジア等，世界 10 の地域においてパーソナリティと不倫傾向および複数恋愛傾向の関係について分析を行なった。その結果，協調性や勤勉性が低いほど不倫傾向や複数恋愛傾向が高まることが，地域によらず通文化的に観察された。外向性については，アメリカやヨーロッパ等，いくつかの地域では不倫傾向や複数恋愛傾向を高める効果があったが，アフリカや東アジア等では，そのような効果は観察されず，地域による差異があった。神経症傾向と開放性については，どの地域においても不倫傾向や複数恋愛傾向との関連は見られなかった。

このように，海外の研究においては，ビッグファイブによるパーソナリティと性交経験人数やそれに近い変数との関連性がいくつか報告されている。しかし，日本においてパーソナリティと性交経験人数との関係を分析した研究は皆無である。

古島・服部・山本・洲崎・高山・有吉（2014）は，高校生男女 400 名を対象に分析を行い，外向性が高いほど性交経験を持ちやすいことを明らかにした。しかし，この研究が分析したのは性交経験の有無であり，性交渉を持った相手の数ではない。さらに分析対象は高校生に限定されており，成人については検討されていない。

Schmitt（2004）においては，東アジアのサンプルの一部として日本のデータも含まれているが，香港や台湾のデータと合併して分析が行われており，日本独自の分析結果は明らではない。加えて，Schmitt（2004）が従属変数とした不倫傾向と複数恋愛傾向については，「自分の知人と比較して，自分はそのような傾向がどれくらい強いと思うか」という主観的な測度が採用されており，不倫の事実の有無や，同時期に性的関係を持った人数について客観的な測定が行われたわけではない。

このように，日本社会の主要な構成員である成人男女については，パーソナリティと性行動の関係，特に性行動の活発さの一側面としての性交経験人数の関係については，ほとんど何も分かっていないというのが現状である。そこで本研究は，日本の成人男女を対象に，性交経験人数について直接的に質問する客観的な測定を行う。これにより，先行研究の問題点を克服しながら，研究上の空隙を埋めることが本研究の目的である。

本研究は検討対象を性行動に限定しているが，具体的な変数を実証的に分析することにより，「パーソナリティは，人間の行動にどのように影響するのか」，「パーソナリティは，人びとの人生にどのような差異をもたらすのか」という社会科学にとって重要な，より大きな問いの解明に貢献するものである。本研究のように，ブレイクダウンされた個別の問いに対して実証的に解答する研究を蓄積することにより，パーソナリティと人間行動の関係という，より大きな問いを解明していけると考えられる。

2. 方法

(1) 調査対象者

日本全国に居住する 20–59 歳の男女（男性 150 名，女性 150 名）を対象に，2019 年 9 月 19 日に Web 調査を実施した。データ収集においては，20 代，30 代，40 代といった各年齢層における男女の数が等しくなるように割り付けを行なった。無職（家事専業）は調査対象に含まれているが，無職（学生）と無職（その他）は除外した。データ収集は（株）楽天インサイトに委託した。

(2) 調査内容

性交経験人数，パーソナリティ（外向性，協調性，勤勉性，神経症傾向，開放性），性別，年齢，教育年数，個人年収についてデータ収集を行った。

性別については，男女別にサンプルを分割するために使用する。心理特性が性行動に及ぼす影響は男女によって異なることを報告する研究（塩谷 2010）があることに加えて，「性的関係におけるイニシアティブの男女間での非対称性」（片瀬 2007）の存在，すなわち性的コミュニケーションの開始においては，一般的に女性よりも男性のほうが積極的に行動することが期待

されているため，男女別にサンプルを分割して分析を行う。

年齢，教育年数，個人年収は，コントロール変数として分析に使用する。特に教育年数と個人年収については，日本社会における階層的地位の指標として利用する。

性交経験人数は次のように測定した。「中学校を卒業してから現在まで，あなたには以下の人が何人くらいいましたか。できるだけ一人一人を思い出して回答してください」という文章を提示したのち，「性交渉を持った人（風俗産業は除く）」という項目について，「(1) 0 人」から「(21) 20 人以上」までの 21 の回答カテゴリの中から 1 つ選択してもらった。

パーソナリティ（外向性，協調性，勤勉性，神経症傾向，開放性）の測定については，「日本語版 Ten Item Personality Inventory（TIPI-J）」（小塩・阿部・カトローニ 2012）を使用した。「次の文章は，あなた自身にどれくらいあてはまりますか。文章全体を総合的に見て，自分にどれだけあてはまるかを評価してください」という文章に続いて，「活発で，外向的だと思う」（外向性），「ひかえめで，おとなしいと思う」（外向性：逆転項目），「他人に不満を持ち，もめごとを起こしやすいと思う」（協調性：逆転項目），「人に気を使う，やさしい人間だと思う」（協調性），「しっかりしていて，自分に厳しいと思う」（勤勉性），「だらしなく，うっかりしていると思う」（勤勉性：逆転項目），「心配性で，うろたえやすいと思う」（神経症傾向），「冷静で，気分が安定していると思う」（神経症傾向：逆転項目），「新しいことが好きで，変わった考えを持つと思う」（開放性），「発想力に欠けた，平凡な人間だと思う」（開放性：逆転項目）という 10 項目をランダマイズして提示し，「(1) 全く違うと思う」から「(7) 強くそう思う」までの 7 段階で評定してもらった。データ収集後，逆転項目の処理をした上で，各パーソナリティに対応する 2 項目を合計して，外向性，協調性，勤勉性，神経症傾向，開放性の指標とした。

性別と年齢については，調査会社が回答者の基本情報としてデータを保持していたので，Web 調査では測定を行わず，調査会社からのデータの提供を受けた。

教育年数の測定は，次の通りである。「あなたとご両親の学歴についてお知らせください」という文章を見せた上で，「あなた」という項目について，「中卒」，「高卒」，「専門学校卒（高校を卒業していない）」，「専門学校卒（高校を卒業している）」，「高専卒」，「短大卒」，「大卒」，「大学院卒」の中から 1 つ選んでもらった。データ収集後に，中卒：9 年，高卒：12 年，専門学校卒（高校を卒業していない）：9 年，専門学校卒（高校を卒業している）：12 年，高専卒：14 年，短大卒：14 年，大卒：16 年，大学院卒：18 年，という数値を割り当て，教育年数を作成した。

個人収入については，「あなたの個人年収と，世帯年収（世帯全体で合計した年収）をお知らせください。※働いて得た収入だけでなく，仕送り，生活保護，資産からの収入等（不労所得）も含めて回答してください」という文章を提示した上で，「個人年収」という項目について，「0（収入なし）」，「1–99 万円」，「100–199 万円」，「200–299 万円」，「300–399 万円」，「400–499 万円」，「500–599 万円」，「600–699 万円」，「700–799 万円」，「800–899 万円」，「900–999 万円」，

「1000–1499 万円」,「1500–1999 万円」,「2000 万円以上」という回答カテゴリの中から 1 つ選択してもらった。データ分析においては，各収入カテゴリの中央の値（例：100–199 万円なら 149.5 万円）を個人収入の値として利用した。「2000 万円以上」については，2000 万円として扱った。

3. 結果

(1) 記述統計

分析に使用する変数の記述統計は表 1 の通りである。性交経験人数の平均値については，男性では 5.107 人，女性では 4.653 人となっていたが，統計的な有意差はなかった。パーソナリティについては，外向性と勤勉性では，男女間で有意な平均値の差は見られなかったが，協調性（男性のほうが高かった），神経症傾向（女性のほうが高かった），開放性（男性のほうが高かった）では有意差が見られた。教育年数と個人年収については，男性のほうが女性よりも平均値が高かった。

表 1　記述統計（男性 150 名，女性 150 名）

	平均		標準偏差		最小値		最大値	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
性交経験人数 (t＝−0.709)	5.107	4.653	5.864	5.188	0	0	20	20
外向性 (t＝0.968)	7.680	7.953	2.409	2.480	2	2	14	14
協調性 (t＝−2.601)*	6.847	6.360	2.164	1.919	2	2	13	11
勤勉性 (t＝−0.538)	7.993	7.847	2.071	2.616	2	2	14	14
神経症傾向 (t＝2.407)*	7.733	8.300	1.853	2.210	2	3	14	14
開放性 (t＝−2.233)*	8.287	7.773	1.766	2.193	4	2	12	14
年齢 (t＝−0.307)	40.120	39.733	10.957	10.810	21	21	59	59
教育年数 (t＝−2.490)*	14.553	13.887	2.327	2.310	9	9	18	18
個人年収 (t＝−9.871)***	564.860	209.050	351.282	267.376	0	0	2000	2000

* $p<0.05$　*** $p<0.001$

(2) 性交経験人数に対するパーソナリティの効果

性交経験人数に対するパーソナリティの効果を調べるため，性交経験人数を従属変数，外向性，協調性，勤勉性，神経症傾向，開放性を独立変数，年齢，教育年数，個人収入を統制変数とした重回帰分析を男女別に行った（表 2）.

男性においては，外向性が性交経験人数に対して有意な正の効果を持っていた。このことは，外向性の高い男性ほど性交経験人数が多くなることを意味している。外向性の偏回帰係数は 0.461 であるため，外向性が 1 ポイント増加するごとに，性交経験人数は 0.461 人増えることが分かる。

協調性は性交経験人数に対して有意な負の効果を持っていた。すなわち，協調性の低い男性

ほど性交経験人数が多くなることが分かる。協調性の偏回帰係数は－0.436 であるため，協調性が 1 ポイント低下すると，性交経験人数が 0.436 人増えるという関係がある。勤勉性，神経症傾向，開放性は有意な効果を持たなかった。

教育年数は有意な負の効果を持っており，学歴が低くなるほど性交経験人数が大きくなるという関係が見られた。高卒と大卒では教育年数に 4 年の差があるが，－0.541 という偏回帰係数に 4 をかけると－2.164 となるため，この 4 年という教育年数の差によって，性交経験人数には 2.164 人の差が生じることが明らかになった。

個人収入は有意な正の効果を持っており，個人収入の多い人びとほど性交経験人数が多くなっていた。偏回帰係数は 0.004 なので，個人年収が 100 万円増えると，性交経験人数は 0.4 人増えるという関係があることが分かった。

女性の場合は，パーソナリティはいずれも有意な効果を示さなかった。教育年数については，男性と同様に性交経験人数との負の関連性が見られたが，5% 水準では有意ではなかった。個人年収については，有意な正の効果が見られ，個人年収の高い女性ほど性交経験人数が多くなっていた。偏回帰係数は 0.006 であり，個人年収が 100 万円増加すると，性交経験人数は 0.6 人増えるという関係があることが確認された。

表 2　性交経験人数の重回帰分析

	男性			女性		
	偏回帰係数	標準誤差	標準化偏回帰係数	偏回帰係数	標準誤差	標準化偏回帰係数
外向性	.461 *	.215	.189	.106	.176	.050
協調性	－.436 *	.217	－.161	.098	.231	.036
勤勉性	.180	.236	.063	.006	.177	.003
神経症傾向	.372	.274	.118	.008	.201	.004
開放性	.110	.302	.033	－.027	.199	－.011
年齢	.005	.046	.010	－.010	.039	－.022
教育年数	－.541 *	.209	－.215	－.362 †	.185	－.161
個人年収	.004 **	.001	.240	.006 ***	.002	.306
切片	4.723	5.130		7.488	4.861	
決定係数	.145 **			.110 *		
ケース数	150			150		

* $p<0.05$　** $p<0.01$　*** $p<0.001$　† $p<0.10$

4. 考察

本研究の課題は，日本における成人男女の性交経験人数とパーソナリティの関連性を解明することであった。分析の結果は，男性においては外向性と協調性が有意な効果を持ち，外向性が高いほど，また協調性が低いほど性交経験人数が大きくなる傾向が見られた。しかし，女性

の場合は，いずれのパーソナリティも有意な効果を持たなかった。

外向性が成人男性の性交経験人数を高めるという本研究の結果は，日本における調査データを分析し，外向性の高い高校生ほど性交経験を持ちやすいことを示した古島ら（2014）と整合的である。2つの研究の従属変数は厳密には同じではないが，外向性の高さは性交渉に繋がりやすいという関係性を示唆している点で両者は共通している。

しかし，Schmitt（2004）による日本を含めた東アジア（香港，日本，韓国，台湾）のデータ分析においては，外向性が不倫傾向や複数恋愛傾向を高める効果は確認されておらず，本研究の結果とは整合的ではない。しかし，不倫や複数恋愛（同時期に複数の性的パートナーを持つこと）と性交経験人数は相関があると考えられるものの,「同時期に複数の性的パートナーを持つことはないが，これまでに関わった性的パートナーの数が多かった」というケースもあるため，両者は異なる変数であり，外向性の効果にも差異があった可能性がある。日本を含めた東アジアでは，外向性は不倫や複数恋愛には影響しないが，単一の性的パートナーを頻繁に変更するという行動には影響しているのかもしれない。

東アジア以外の海外のデータ分析に目を向けると，アメリカの大学生を対象に分析を行ったRaynor and Levine（2009）では，外向性の高い大学生ほど過去1年間の性交経験人数が大きくなることが報告されており，本研究の結果と一致している。さらに，アメリカ，ヨーロッパ，アジア，オセアニア等，世界10地域の全データを合併した分析では，外向性は不倫傾向や複数恋愛傾向を高める効果を持つことが観察されている（Schmitt 2004）。

以上の結果をまとめると，外向性が高いほど性行動が活発になり，性交経験人数も大きくなると言えるだろう。

それでは，なぜ外向性が高いと性交経験人数が増えやすいのだろうか。これについては，2つの解釈が可能である。1つは「状況選択」（situation selection）のメカニズムによるものである（Nettle 2007=2009）。「状況選択」とは，パーソナリティが直接的に行動に影響する（パーソナリティ → 行動）のではなく，特定の行動が生じやすくなるような状況を選択するようにパーソナリティが作用し，その結果，ある種の行動が取られやすくなるというものである（パーソナリティ → 状況 → 行動）。外向性の高い人びとは，自宅にて1人で過ごすよりも，外出して他者と交流することを好むため，パーティ等に積極的に参加する。そこで出会った人びとと親密になることで性行動が促進され，性交経験人数の増加に繋がると考えられる。

もう1つの解釈は，外向性に関する包括的な議論に依拠するものである。外向性の高い人びとの特徴として，金銭，社会的地位，競争に勝つこと，性行動に対する関心が強いことが知られており，外向性という心理特性は「報酬に対する反応の強さ・敏感さ」として要約可能であると言われている（Nettle 2007=2009）。したがって，外向性の高い人とそうでない人は，そもそも「どれくらい性交渉を持ちたいと思うか」が異なっている。外向性の高い人びとは，性交渉という報酬に対してより強く反応するため，性交経験人数が大きくなりやすいと考えられ

る。

なお，これらのメカニズムは単独ではなく，両者が組み合わさって性交経験人数を高める可能性もある。すなわち，状況選択によって新たな人物との出会いが豊富にある状況に身を置き，そこで出会った人物に対して，性的により強く惹かれることで性行動が生じやすくなるというメカニズムである。

ただし，これらの解釈からは，本研究で示された外向性の効果の男女差については十分な説明ができない。本研究では外向性が有意な効果を持ったのは男性だけであり，女性では性交経験人数との関連性は見られなかった。しかし，先行研究では，海外の研究（Raynor and Levine 2009）だけでなく，日本の研究（古島ら 2014）においても，外向性は男女に共通して性交経験人数を高める効果があることが報告されている。日本における外向性の効果の男女差について判断するためには，さらなる実証研究が必要である。

次に，協調性の効果について議論する。本研究では，協調性の低い男性ほど性交経験人数が大きくなっていたが，女性では無関連であった。日本の高校生の性交経験の有無に着目して分析を行った古島ら（2014）では，協調性の有意な効果は確認されなかった。日本を含めた東アジアのデータを分析した Schmitt（2004）では，協調性が低くなるほど不倫傾向や複数恋愛傾向が強まる傾向があったが，男女差は見られなかった。このように，日本や東アジアのデータ分析においては，協調性の効果については一貫した結果は得られていない。

ただし，アメリカの大学生男女を分析した Raynor and Levine（2009）は，協調性が低いほど過去 1 年間の性交経験人数が大きくなることを，男女の合併データから示している。さらに，世界 10 地域の全データを併せて分析した Schmitt（2004）においては，男女いずれの場合も不倫傾向や複数恋愛傾向に対して，協調性は負の効果を持っていた。

以上の結果をまとめると，協調性の低い人びとは，性交経験人数が大きくなりやすいと言えるだろう。

では，どのようなメカニズムによって，両者の関連性が生じるのだろうか。協調性の低い人びとは，他者の感情に対する興味が薄く，共感性が低いという点が重要であると考えられる。1 つの解釈としては，自分は性交渉をしたいと思っているが，相手はそれほど性交渉をしたいとは思っていないという状況において，協調性の低い人びとは，相手の感情にあまり関心を持たないため，自分の願望のみに基づいて性交渉を開始するかもしれない。一方，協調性の高い人びとは，たとえ自分が性交渉を望んでいたとしても，相手がそうではない場合には，相手の気持ちを感じ取って性交渉を控える可能性がある。

2 つ目の解釈は，浮気や不倫等に関するものである。すでに性的パートナーがいる状況において，別の相手と性的関係を持つか否かの判断に対して，協調性が影響している可能性がある。協調性の低い人びとは，自分が浮気をした場合に，既存の性的パートナーがどのような感情を持つかといったことに対して関心を払いにくいため，自らの行動を抑止せず，新たな相手

と性交渉を行いやすいかもしれない。一方，協調性の高い人びとは，既存のパートナーの感情を共感的に想像するため，別の相手との性交渉を避けるかもしれない。

さらに，3つ目の解釈として，協調性の高い人びとの場合は，他者の感情に共感的に配慮するという特徴によって，性的パートナーとの交際が長続きしやすい可能性を指摘できる。複数恋愛をしないのであれば，交際期間が長くなるにつれて性交経験人数は小さくなると考えられる。以上，3つのメカニズムによって，協調性は性交経験人数に対する負の効果をもたらしている可能性がある。

本研究では，性交経験人数に対する協調性の負の効果は，男性のみで観察され，女性では無関連であった。これについては,「性的関係におけるイニシアティブの男女間での非対称性」(片瀬 2007) の観点から理解できるかもしれない。性行動は女性よりも男性の側から開始されることが多いため，先述の3つのメカニズムのうち,「相手の感情に対する配慮の低さが性交渉の開始に繋がる」という1つ目のメカニズムが男性において作動している可能性がある。ただし，協調性の効果の男女差については，本研究とは異なる結果を示す先行研究もあるため，日本におけるさらなる実証研究が必要である。

パーソナリティ以外の統制変数については，教育年数と個人年収が有意な効果を持っていた。教育年数については，男女に共通して負の効果が見られ，教育年数が低いほど性交経験人数が大きくなっていた。ただし，女性の場合は10%水準の有意傾向に留まっていた。

この結果については，大卒者と非大卒者の高校時代における時間の使い方の差異が影響しているかもしれない。高校生のころ，大卒者（調査時点における大卒者）は受験勉強等の進学準備をしているが，非大卒者（調査時点における非大卒者）はそのような準備をする必要がないので，その時間を性行動も含めた友人や知人との交流に充てられる。その結果，非大卒者は大卒者よりも早期に性行動を開始し，調査時点における性交経験人数に差が生まれるという可能性である。

しかし，大学時代（18–22歳程度）も考慮するならば，大卒者（大学生として4年程度を過ごす）のほうが，非大卒者（主として就業している）よりも自由時間が多いため，性行動を含めた友人らとの交流をより多く行えると議論することもできる。

したがって，学歴が低いほど性交経験人数が大きくなるという本研究の結果を，学生時代の時間の使い方という観点から説明することは困難であるように思われる。両者の関連を生み出す詳細なメカニズムは現時点では不明であるが，学歴の高い人びととそうでない人びとのあいだには，性行動に関する何らかの価値観の差異があり，それが生涯を通じた性交経験人数の差を生み出しているのかもしれない。

個人年収については，男女に共通して有意な正の効果があり，個人年収が多いほど性交経験人数が増えるという関係性が見られた。可能な解釈としては，個人年収が多い人びとほど可処分所得が多いため，外出してイベントに参加する等，他者と出会う機会を多く持つことができ

るというものである。他者との出会いが多ければ，性交渉を持つ相手の数も増えやすいと考えられる。

以上，本研究の遂行により，これまで日本では十分に検討されてこなかった成人男女のパーソナリティと性行動との関連性の一端が明らかにされた。どれくらい多くの相手と性交渉を持つかという性交経験人数に対しては，外向性が高く，協調性が低い男性ほど人数が大きくなることが明らかになった。しかし，女性ではパーソナリティは性交経験人数とは関連していなかった。

最後に，本研究全体の限界として，高回収率のランダム・サンプリング調査ではなく，Web 調査に依拠していることを指摘しておく。そのため，厳密には統計的検定を通した結果の一般化はできない。したがって，本研究の知見が日本の成人男女全体に当てはまると拙速に判断してはならない。全体的な傾向については，実証的な研究を蓄積しながら総合的に判断する必要がある。本研究は，そのような研究の１つとして理解されることが望ましい。

文献

片瀬一男．2007.「青少年の生活環境と性行動の変容－生活構造の多チャンネル化のなかで－」財団法人日本性行動協会（編）『第 6 回 青少年の性行動全国調査報告書』小学館：24–48.

古島大資・服部めぐみ・山本美由紀・洲崎好香・高山直子・有吉浩美．2014.「高校生における性行動とパーソナリティとの関連について」（第 24 回日本健康医学会総会抄録集）『日本健康医学会雑誌』23（3）：192–193.

Nettle, D. 2007. *PERSONALITY: What Makes You the Way You Are*. OUP Oxford（＝竹内和世（訳）. 2009.『パーソナリティを科学する 特性 5 因子であなたがわかる』白揚社）.

Nyhus, E. K. and Pons, E. 2005. “The Effects of Personality on Earnings.” *Journal of Economic Psychology*, 26, 363–384.

小塩真司．2018.『性格がいい人，悪い人の科学』日経プレミアシリーズ.

小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ピノ．2012.「日本語版 Ten Item Personality Inventory（TIPI-J）作成の試み」『パーソナリティ研究』21（1）：40–52.

Raynor, D. A. and Levine, H. 2009. “Associations Between the Five-Factor Model of Personality and Health Behaviors Among College Students.” *Journal of American College Health*, 58（1）, 73–81.

Schmitt, D. P. 2004. “The Big Five related to risky sexual behavior across 10 world regions: Differential personality associations of sexual promiscuity and relationship infidelity.” *European Journal of personality*, 18（4）, 301–319.

塩谷芳也．2010.「高校生の性行動とセルフ・エスティーム」『社会学研究』88：1–25.

塩谷芳也．2019.「心の特性から社会的成功を予測できるか」大渕憲一（編）『こころを科学する：心理学と統計学のコラボレーション』共立出版：36–62.

鈴木公啓．2012.「パーソナリティとその諸理論」鈴木公啓（編）『パーソナリティ心理学概論 性格理解への扉』ナカニシヤ出版：27–37.

The effect of personality on sexual behavior among Japanese adults

Yoshiya SHIOTANI

Abstract

This study examined the association between sexual behavior and personality traits among Japanese adults. An online survey was conducted on Japanese men and women aged between 20 and 59 years (N=300) in 2019. The aim was to measure the number of people who have had sex and their Big Five personality traits, namely extraversion, agreeableness, conscientiousness, neuroticism, and openness to experiences. The multiple regression analysis revealed that extraversion and agreeableness significantly impacted men. Men with high extraversion and low agreeableness tended to have more sexual partners. In contrast, no personality trait significantly affected women. These results were compared with the results of previous studies.

Keywords: sexual behavior, the number of people who have had sex, personality, big five, Japanese adults